

「松右衛門帆」のみならず、この偽作史料の誤まり伝えたところのものは、残すところなく、しかも早急に修正されなければならないものです。

注(1) 寛保3年〔1743〕播州高砂港の船問屋に生まれ、兵庫〔神戸〕に出て「御影屋」の屋号の回船問屋をおこし、蝦夷〔北海道〕ほか諸方の海運にたずさわった。彼は蝦夷通商に活躍しただけではなく、生来工夫、発明の才能があった。「つばくら船」と呼ばれる舟足の速い小舟の考案、北海道産の「新巻」〔塩辛い「塩引」にくらべて上方地方の嗜好に合う塩味のうすい鮭〕の工夫など、その一端である。その中で、特に彼の名を有名にしたものは「松右衛門帆」の開発であった。

彼の最大の事業は、千島列島の開拓であった。ロシア船の出没がしきりにあり、北辺の海防が急務となり、幕府は天明5年〔1785〕、最上徳内を派遣して、エトロフ、ウルップ両島を調査させ、寛政2年〔1790〕兵庫の回船問屋に、エトロフ島の築港を命じた。彼は同業者におされて現地に渡り、みごとに工事を完成した。その後も多額の私財を投じて郷里の高砂港や備後〔広島県〕の鞆〔とも〕の浦港の大修築を行った。幕府は、さきのエトロフ開拓とともに、これらの功績を認めて「工楽」という苗字を与え、帯刀を許した。工楽とは工夫を<sup>○</sup>楽しむ意味であった。彼の配下に、淡路島出身の高田屋嘉兵衛があった。松右衛門の知遇を受け一水夫から身を起した嘉兵衛は遂に千島一帯の漁業権を握る豪商となった。嘉兵衛はロシアの軍艦に捕えられてカムチャッカに拉致されたが、日露間の平和交渉に努め日本人の気概を見せて無事帰国した人物として有名である。松右衛門は文化9年〔1812〕70才で歿した。

注(2) 「日本科学古典全書」第11巻（三枝博音編、朝日新聞社刊）所収

資料 伊達政宗の遣欧使節船の船型などについて（石井謙治、「海事史研究」第8号の内）

石川五右衛門ほか―日本史人物夜話（原田伴彦）

サン・ファン・パプチスタ号の船型（石井謙治、「支倉常長伝」（支倉常長顕彰会編）の内）

贈位諸賢伝上（田尻 佐）

## 93 「加護坊山」の表記はどうか

問 「加護坊山」を「加護峯山」と書いたり、「加護宝山」と書いたりしているのを見ますが、どれが本当の書き表わし方ですか。

答 遠田郡田尻町内〔旧大貫〕にある山の名で、昔から「加護坊山」と書いています。安永4年

〔1775〕4月の「大貫村風土記御用書出」にも『旧跡 加護坊山<sup>(1)</sup>の内 一、三宝加護山国家安楽寺 往古天台宗之寺ニ而右山ニ衆徒仕候由申候唯今ニ山上ニ石場之所相残申候得共右年号知不申候事』とあります。また、天保15年〔1844〕の「無夷山巖峯寺〔きんぼうじ〕由来記」にも『加護坊山は奥州第一の霊場……』とあり、大正15年〔1926〕の「遠田郡誌」や、昭和35年の「田尻町史」等に於ても、勿論「加護坊山」と表記していますから、この書き表わし方をとるべきであります。「加護<sup>×</sup>峯山」と「加護<sup>×</sup>宝山」とは、いずれも同音漢字であるための書き違いか、そうでない場合は文学的表現のため故意に文字差し替えがなされたものであります。

注(1) 遠田郡のほぼ中央を東西12キロ、南北4キロに亘ってなだらかに起伏する丘陵の主峰で、標高224メートル。この山は、東北本線田尻駅の東方約4キロの地点にあり、全山緑の芝生におおわれ、山頂に立てば文字通り360度の広大な景観が展開する。広さは県立旭山公園の30倍の面積をもち、町当局は最近その観光開発に努めている。また、加護坊山は史跡の山でもある。南東の麓には、『すめろぎの御代栄えんと東〔あずま〕なるみちのく山に黄金〔くがね〕華〔はな〕咲く』とうたわれた天平感宝元年〔749〕の黄金初出の地、黄金迫がある。その時代よりも更に80年遡った白鳳期に、第38代天智天皇がこの山に勅願寺の建立を企画されたと伝えられる。これをうけて第40代天武天皇が、山頂に堂塔伽藍を建立し、三宝加護国家安楽寿福田満院と称されたという。寺を中心に108の僧坊が建ちならび、数千の僧徒の大修行場であったが、後には甚だしく墮落し宝亀元年〔770〕出火のため一山全焼し荒廃してしまった。それから約30年後の平安初期大同年間に、坂上田村麻呂がこの丘陵の東部寛岳〔ののだけ〕に、無夷山巖峯寺を建立する時、残存していた僧坊を移建したともいわれている。この山の名は、寺号の中の加護と僧坊の坊とに起原するものである。現在も本堂・前堂・鐘楼・僧坊等の礎石が整然と残っている。又、修業僧が自給のため耕作した耕地跡が、山の東と北面の中腹に残っている。

注(2) 「安永風土記御用書上」を大成した田辺希元は田辺希文の長子、字は子善、通称良輔、損齋〔宮城県史第23巻の解題の中に損齋とあるのは誤〕また東里と号した。父の職を継いで学官となり盛名があった。天明3年〔1783〕63才で歿した。諡して黙成先生という。仙台通町東昌寺に葬る。なお、また父希文の遺業を受けて希元が大半の編纂を終った「伊達世家譜」は、女婿の田辺希績がこれをよく完成した。希元には二男一女があったが、二男共に若死したためである。

注(3) 筆者は秋田喜蔵とあり、「遠田郡誌」「田尻町史」に収録してある。

資料 遠田郡誌（遠田郡教育会編）

田尻町史（田尻町史編纂委員会編）